

四書の訓読における字音の諸問題

—口語的字音から規範的字音へ—

佐藤 進

1. 漢文訓読の訓読みと音読み

訓読は白文（＝無点本）の中国語テキストを大和言葉の「和訓」と中国漢字音を日本化させた「日本漢字音」とを取り混ぜて読む方式である。すなわち「訓読み」と「音読み」とを利用するが、普通は原文の漢字を音読みか訓読みかどちらか一方で読む。たとえば、『論語』の「有朋自遠方來不亦樂乎」を「ともありエンポウよりきたる、またたのしからずや」（平仮名が訓読み、片仮名が音読み）のように、訓読みと音読みとの「住み分け」が行われ、どちらか一方で読めばよい（画像資料1）。

ただし、同じ字句に音読みも訓読みも両方施す方式が「文選読み」として行なわれた。たとえば藤原惺窩の『詩経』国風周南「関関雉鳩在河之洲」の訓点は「カンカンとあひやわらげるシヨキュウのみづとり、かわのすにあり」となる。しかし、四書の訓読では文選読みはほとんどないと言ってよい（画像資料2）。

現存する訓点資料を見てみると、訓読みの語形は仮名表記がついて分かりやすいが、音読みはついていないことが多い。たとえば、『論語』の古訓（1346年頃）を伝えるとされる刊本（1848年刊、いわゆる北野学堂本）では「【子】曰學而時習之不亦悦乎、有朋自【遠方】來不亦樂乎、人不知而不愠不亦【君子】乎」に「子（-）」「遠-方ハウ」「君-子」と三ヶ所に「音合附」がつくが、字音がついているのは「方ハウ」のみである。（四角の「方」はホウと書き分けるからであろう）（画像資料1）。

文選読みですら、上の例の惺窩点『詩経』も「関関」「雉鳩」に字音の仮名はついていない。これらは現代の漢字音では「関＝カン」「鳩＝キュウ」であるが、旧漢字音表記でそれぞれ「関＝クワン」「鳩＝キウ」であった。そこで、「関」では日本になかった拗音「クワン」で読まれたのはいつ頃からか、それがまたいつごろか

ら直音の「カン」で読まれるようになるか、「鳩」では直音の「キウ」がいつ頃から拗音「キユウ」で読まれるようになるのか、はたまた、実際の発音は別にして単なる表記だけのことか、これらを確認しないと訓読の歴史は描けないのである。

そもそも、漢文訓読の資料を歴史的に並べると、日本語の音韻史を反映したものになるか、言い換えると、訓読史と音韻史が平行関係にあるか、そのこと自体が問題であろう。訓読の研究においては、訓読に用いられる日本語の語彙や文法（主として活用）が『源氏物語』などの和語（＝大和言葉）と区別して用いられていたことが早くから知られており、前者は「訓読語」としてその変遷をたどる研究が成果をあげてきた（築島 1963、小林 1980 その他）。

一方、漢字音の歴史も和語の音韻の歴史とは別に研究されてきたが、漢字音研究にはそもそも中国語音韻史の研究が必要になるので、国語学者からは敬遠される傾向が続いてきた。しかし近年、沼本 1982、沼本 1997、呉音の小倉 1995、漢音の佐々木 2009、唐宋音の奥村 1973 などの有益で重厚な研究が公にされて発展して来ている。ただ、それも平安鎌倉時代にとどまり、「四書」の訓読資料が残り始める室町時代以降の研究は少ない（奥村 1973 は数少ない例外である）。その理由の一端は、室町時代以降になると現存する漢字字書が豊富に存在するからであろう。本稿では室町時代における四書の音読みの問題を提起し、それらの問題と古字書との関係を論じてみたい。

2. 四書の音読みの問題

まず、別表の「大学聴塵非標準仮名字音」をご覧ください。この表に取り上げた 81 例は、清原家の訓読が基本的に漢音で読まれたとする認識に反する『大学聴塵』仮名字音のリストである。清原家が漢音読みしたという認識については、たとえば高山寺典籍文書総合調査団 1980 に載せる現存最古の『論語』訓点本である高山寺本『論語集解』巻七巻八（鎌倉初期書写という）の翻刻に際して、仮名書きのない字音のすべてに漢音で仮名をつけたところからもその認識の普遍性がうかがわれる。したがって、現存清原家資料に見られる漢音以外の仮名書き字音注には注意が必要なのである。ちなみに筆者の調査によれば、『大学聴塵』仮名字音注には

漢音読みの注が 168 例あった。

まず、この別表からすぐに分かることは、呉音読みが 38 例あることである。呉音というのは、桓武天皇が延暦十一年（792 年）に漢音奨励の勅を出して大学寮の儒生に禁じたそれまでの日本漢字音のことをいう（呉音の別名は和音である）。ただ、呉音は漢音が一般的になっても、その後長く官職名や仏典の読誦などに用いられた。したがって、四書の訓読に呉音が混入するのは儒家の読みではなく、仏家の読みが混入したものと言うことが出来る。しかし、高山寺典籍文書総合調査団 1980 の解説が述べるように、清原家の訓読には当時の口語が反映されていると見るほうがよい。

たとえば、促音便の読み方を見てみよう。高山寺本『論語集解』巻七・衛霊公篇の「行篤敬」に「カウ トツケイあらば」と、喉内入声（= k 入声）であるべき「篤トク」に促音便のツ、舌内入声（= t 入声）でカナ注をほどこしている（二箇所、画像資料 3）。トクケイではなく、トツケイと読むのは明らかに口語の発音である。

すなわち、清原家の『論語』や『大学』の伝習は口語的音韻を用いて行なわれたと考えるのが自然である。『大学聴塵』の呉音読みは仏家の読みにもとづくものではなく、日本の漢字音として定着した和音であったと考えられるのである。

しかしながら、高山寺典籍文書総合調査団 1980 の高山寺『論語』が徹底して漢音を用いたのには恐らく理由がある。その理由の一つは、清原家に伝わる『論語集解』の写本の中にはかなりの程度に漢音を採用したものがあることであろう。建武四年（1337）の年紀があるいわゆる建武本『論語集解』（大東急記念文庫蔵）がそれである（画像資料 6）。

いま、建武本『論語集解』に到るまでの清原家本の現存資料を列举すると以下のようになる。

Ⓐ：鎌倉初期・高山寺蔵『論語集解』巻七・八（現存最古の『論語』訓点本、画像 3）

Ⓑ：文永五年（1268）醍醐寺・東洋文庫蔵『論語集解』巻七・八（中原本で校合、画像 4）

Ⓒ：正和四年（1315）東洋文庫蔵『論語集解』（清原教隆 1199-1265 が、仁治三

年（1242）に書写したものにより、その後さらに正和四年（1315）に移写したもの、画像5）

㊦：建武四年（1337）大東急記念文庫蔵『論語集解』、画像6

ここで、先にあげた「篤敬」の仮名注を見てみると以下のようなになる。㊦トツケイ、㊧ツかクか不鮮明で判読不能、㊨トツ敬、㊩トク敬。すなわち、㊩建武本から異例の舌内入声トツではなく正例の喉内入声トクに書き換えられたのである。ちなみに、清原家の訓読『論語』を全文にわたって仮名で書いたと伝えられる『かながきろんご』には幸い衛霊公篇の「篤敬」部分が残されており（安田文庫旧蔵本、室町中期写本）、そこでは明らかに「とくけい」ではなく「とつけい」と読まれている（柳原 2009、また大友信一等 1996）。

ついでのことであるが、書名の『論語』についてしてみると、㊦から㊨までには確かな仮名表記が見られないが、㊩には漢音のリングョがついている（画像7）。したがって高山寺典籍文書総合調査団 1980 には、推定としながらもそれにもとづいて㊦にリングョの読みを与えているのである。

清原家では『論語』を本当にリングョと読んだであろうか。確かに『論語』の「論」は来母諄韻平声で、漢音呉音はともにリンである（憲問篇「討論」の来母恩韻去声「論」はロン）。しかし、代表的漢音資料の長承本『蒙求』でも平声の「論」はロンと表記されている（築島裕 1990、築島裕等 1995）。来母恩韻去声「論」のロンが慣用音として広く使われたとみて良い。だからこそ、先にあげた『かながきろんご』を受け継ぐ江戸中期の『仮名書き論語』も「路んご」と表記されている（画像8、安田文庫本には「ろんご」の表記はないが、『仮名書き論語』にはある。柳原 2009、大友信一等 1996）。筆者は清原家でも『論語』を当時の和音ロンゴで読んでいたのではないかと推測する。

では、なぜ建武本『論語集解』ではリングョと書かれているか。そこには、当時さかんに作られた漢字字書の利用があったのではないかと考える。

3. 主要古字書と論語の訓読

いま取りあえず、現存する古字書の成書ないしは刊行の時期と清原家の『論語』

の訓点本を以下のような略年表にまとめてみる（国語学会 1980 と西崎亨 1995 を参照した）。

（1）奈良から平安初期

- 835 承和 2 『篆隸万象名義』（空海）この年以前に成書
- 862 貞観 4 『東宮切韻』（菅原是善）この年以前に成書
- 892 寛平 4 『新撰字鏡』（昌住）草稿なる

（2）平安中期から院政期

- 934 承平 4 『倭名類聚抄』（源順）成書
- 1032 長元 5 『大般若経字抄』（藤原公任）この頃成書
- 1100 康和 2 図書寮本『類聚名義抄』成書
- 1180 治承 4 三卷本『色葉字類抄』（橘忠兼）成書

（3）鎌倉時代から室町時代（**A**～**D**は前節で言及したもの）

- A**：鎌倉初期・高山寺旧蔵・京都国立博物館寄託『論語集解』巻七・八（清原本）
現存最古の『論語』訓点本
衛霊公「篤敬」= トツケイ
- 1227 安貞 1 世尊寺本『字鏡』（撰者不詳）この頃成書
- 1236 嘉禎 2 『浄土三部経音義』（信瑞）成書
- 1241 仁治 2 観智院本『類聚名義抄』書写（画像 9、11）
- 1245 寛元 3 『字鏡集』（伝・菅原為長）この頃成書
- B**：1268 文永 5 醍醐寺・東洋文庫蔵『論語集解』巻七・八（清原本+中原本で校合）
- 1303 嘉元 1 高山寺旧蔵・京都国立博物館寄託『論語』巻四・八（中原本）
促音にツ表記を多用（去サツテ・起タツテ）
- 1307 徳治 2 『聚分韻略』（虎関師鍊）成書
- C**：1315 正和 4 東洋文庫蔵『論語集解』

(清原教隆 (1199-1265) が、仁治三年 (1242) に書写したものにより、その後

さらに正和四年 (1315) に移写したもの)

衛霊公「篤敬」 = トツ敬

● 1327 嘉暦 2 書陵部蔵『論語集解』(清原教隆点)

Ⓓ: 1337 建武 4 清原家『論語集解』(清原頼元点と卷七以降の清原良兼点)

衛霊公「篤敬」 = トク敬

「論語」をリンギョと読むなど、徹底した漢音読み

● 1364 正平 19『正平版・論語』(道祐) 刊行 (大阪府立中之島図書館蔵本書込みトツ)

1394 応永 1『倭玉篇』(撰者不詳) この頃成書

1444 文安 1『下学集』(東麓破衲) 成書

1469 文明 1『新韻集』(万里集九?) この頃成書

1479 文明 6『節用集』この頃成書 (画像 10、文明～天文間の「黒本本」に論語ロンゴとある)

『論語』から句の全体を引挙 (953 箇所、同一句を異なる訓読で引用する例もある)

「言」字下に引用する衛霊公「篤敬」にはトクケイとある (画像 10)

1481 文明 13 薩摩版『聚分韻略』刊行 (現存最古)

● 1533 天文 2『天文版 論語』(阿佐井野氏) 刊行

衛霊公「篤敬」 = トク敬

1564 永禄 7 永禄本『韻鏡』刊行

1598 慶長 3『落葉集』刊行 (キリシタンの音声分析) (1603 日葡辞書に Rongo と)

以上の略年表から分かるように、Ⓐの高山寺本『論語集解』が書写される前の字書では、治承四年 (1180) 成書の三卷本『色葉字類抄』ではじめて仮名字音を付して編纂された。しかし、イロハ配列の語彙集である『色葉字類抄』は、漢籍読解の工具書として編集されているわけでもなく、清原家の学問に影響したとは思われな

い。仮名字音があって漢字音の参考書となりうるのは、仁治二年（1241）観智院本『類聚名義抄』や寛元三年（1245）『字鏡集』などである。さらには、漢音の工具書として徳治二年（1307）『聚分韻略』も使うことができたであろう。

そういう背景を考えると、十三世紀から十四世紀の初頭にかけて、㊦建武四年（1337）に清原家累代の点を集成した『論語集解』が誕生するための字書環境が整ったと言ってよい。つまり、建武本『論語集解』の仮名字音は、こうした字書の利用によってほどこされたものだと言えるのではないか。具体的に言えば、当初の「篤敬」をトツケイとした口語的字音注記が、字書の利用によってトクケイとする規範的字音注記に変わっていったのである。

ただし、建武本『論語集解』の仮名字音の書き込みが、はたして建武当時のものであるかどうかは検討の余地がある。各種の字書の漢音表記を参照して、詳細な検討を行わなければならない。ただその検討を経ずして敢えて言うと、清原家の『論語』の訓読が全面的に漢音を用いてなされたごとくに認識するのは妥当ではない。『大学聴塵』に少なからず和音（＝呉音）を用いていたように、当時の口語的な字音を用いてなされていたとするのが妥当である。高山寺典籍文書総合調査団 1980 の清原家本に「推定」と断りながらも、全面的に漢音をあてるのは誤解を生む危険性がある。まして、同書の漢字索引に、たとえば「論」に清原本中のロン（憲問篇の「討論」）と推定漢音のリンとを並行して掲げるのはまずい処理であったと言わざるを得ない（索引にはその区別をマークしない）。

筆者らは現在「清原宣賢漢籍抄翻刻叢刊」を編集中であるが、可能なかぎり清原家の実際の講学、なかんずくその訓読の実態を反映するような翻刻を提供したく思う次第である。

〈参考文献〉

- 大友信一等 1996 『仮名書き論語』 翰林書房
 奥村三雄 1973 『聚分韻略の研究』 風間書房
 小倉肇 1995 『日本呉音の研究』 新典社
 高山寺典籍文書総合調査団 1980 『高山寺古訓点資料 第一』 東大出版会
 国語学会 1980 『国語学大辞典』 東京堂出版
 小林芳規 1980 『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓讀の國語史的研究』 東大出版会

四書の訓読における字音の諸問題

- 佐々木勇 2009 『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』 汲古書院
築島裕 1963 『平安時代の漢文訓読語につきての研究』 東大出版会
築島裕 1990 『長承本 蒙求』 汲古書院
築島裕等 1995 『日本漢字音史論輯』 汲古書院
西崎亨 1995 『日本古辞書を学ぶ人のために』 世界思想社
沼本克明 1982 『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』 武蔵野書院
沼本克明 1997 『日本漢字音の歴史的研究』 汲古書院
柳原恵津子 2009 「東京大学国語学研究室蔵『仮名論語』について (一)」 『日本語学論集』 5
以上

付記：本稿は2012年11月2日台湾清華大学学術研討会「日本四書学史の研究」において宣読したものである。主宰の鍋島亜朱華女史には深くお礼申し上げます。

【キーワード】

・ 四書 ・ 訓読 ・ 漢字音 ・ 清原家 ・ 口語音

四書の訓読における字音の諸問題

番号		聽塵字音	標準字音	声	韻	開合	等	調	攝	所在箇所
1	隈	アイ平	漢ワイ	疑	虞	合	三	平	遇	38a8 注
2	厭	アン	漢エム	影	豔	開	三	去	咸	47a3 経
3	厭	アン	漢エム	影	琰	開	三	上	咸	47a5 注
4	畏	イ	漢キ	影	未	合	三	去	止	41b8 聴
5	有	ウ	漢イウ呉ウ	云	有	開	三	上	流	19a3 聴
										19a3 聴
6	蔚	ウツ入	漢キ慣ウツ	影	物	合	三	入	臻	36b6 注
7	會	エ	漢クワイ呉エ	匣	泰	合	一	去	蟹	19a8 聴
8	焉	エン	漢エン	影	仙	開	三	平	山	48b6 注
9	學	カツ清	漢カク	匣	覺	開	二	入	江	13a3 序
10	毅	キ	漢クキ	疑	未	開	三	去	止	39b1 聴
11	夔	キ	漢クキ	羣	脂	合	三	平	止	10a1 聴
12	況	キヤウ	漢クキヤウ	曉	漾	合	三	去	宕	38a7 注
13	行	キヤウ	漢カウ呉ギヤウ	匣	庚	開	二	平	梗	08a6 聴
										29a1 聴
										29b4 聴
										29b5 聴
14	經	キヤウ	漢ケイ呉キヤウ	見	青	開	四	平	梗	01a2 聴
										02a6 聴
15	曲	キヨク	漢クキヨク	溪	燭	合	三	入	通	16b5 序
16	均	キン平	漢クキン	見	諄	合	三	平	臻	58a5 注
17	諼	クワン	漢クエン	曉	元	合	三	平	山	38a7 注
18	下	ケ	漢カ呉ゲ	匣	馬	開	二	上	假	37b7 注
19	化	ケ	漢クワ呉クエ	曉	禡	合	二	去	假	08b8 聴
20	外	ケ	漢グワイ呉グエ	疑	泰	合	一	去	蟹	19a6 聴
21	教	ケウ	漢カウ呉ケウ	見	效	開	二	去	效	01b7 聴
22	迸	ケキ	漢ハウ呉ヒヤウ	幫	諍	開	二	去	梗	66a3 注
23	謙	ケフ	漢ケム	溪	添	開	四	平	咸	45b4 経
24	狹	ケフ	漢カフ呉ケフ	匣	洽	開	二	入	咸	59b1 注
25	原	ケン	漢グエン	疑	元	合	三	平	山	02a1 聴
26	玄	ケン	漢グエン	匣	先	合	四	平	山	01a5 聴
27	居	コ	漢キヨ呉コ	見	魚	開	三	平	遇	09a1 聴
										09a2 聴
28	拳	コ	漢キヨ呉コ	見	語	開	三	上	遇	37b6 注

29	極	コク	漢キヨク呉ゴク	羣	職	開	三	入	曾	01b3 聽
30	者	サ	漢シヤ	章	馬	開	三	上	假	59b4 聽
31	三	サン	(漢サム)	心	談	開	一	平	咸	70a8 聽
32	從	シウ	漢シヨウ呉ジユウ	從	鍾	合	三	平	通	59b4 聽
33	苟	シヤ	漢コウ	見	厚	開	一	上	流	48b6 注
34	情	シヤウ	漢セイ呉ジヤウ	從	清	開	三	平	梗	50a2 聽
35	性	シヤウ	漢セイ呉シヤウ	心	勁	開	三	去	梗	01b7 聽
										05b3 聽
										15a4 聽
										25b2 聽
36	正	シヤウ	漢セイ呉シヤウ	章	勁	開	三	去	梗	06b1 聽
37	宗	シユ	漢ソウ呉シユウ	精	冬	合	一	平	通	02a3 聽
38	脩	シユ	漢シウ呉シユ	心	尤	開	三	平	流	38b4 注
39	審	シン	(漢シム)	書	寢	開	三	上	深	34a1 注
40	岑	シン平	(漢シム)	崇	侵	開	三	平	深	36b6 注
41	足	スク	漢シヨク呉ソク	精	燭	合	三	入	通	46b1 注
42	寸	スン	漢ソン呉スン	清	恩	合	一	去	臻	26b4 聽
43	潛	セン平	(漢セム)	從	鹽	開	三	平	咸	57a5 注
44	足	ソク	漢シヨク呉ソク	精	燭	合	三	入	通	37b6 注
										37b7 注
45	沮	ソ上	漢シヨ呉ソ	從	語	開	三	上	遇	47a5 注
46	躰	タイ	漢テイ呉タイ	透	齊	開	四	上	蟹	04b5 聽
47	體	タイ	漢テイ呉タイ	透	齊	開	四	上	蟹	04b3 聽
48	錫	タウ	漢ヤウ	心	錫	開	四	入	梗	38b1 注
49	談	タン	(漢タム)	定	談	開	一	平	咸	09a6 聽
50	貪	タン	(漢タム)	透	覃	開	一	平	咸	54a7 経
51	重	チウ	漢チヨウ呉ヂウ	澄	鍾	合	三	平	通	44a3 聽
52	鄭	チヤウ	漢テイ呉ヂヤウ	澄	勁	開	三	去	梗	01a5 聽
53	沈	チン平	(漢チム)	澄	侵	開	三	平	深	19b8 序
54	推	ツイ	漢呉タイ漢呉スイ	透	灰	合	一	平	蟹	38a8 注
55	通	ツウ	漢トウ呉ツウ	透	東	合	一	平	通	06b1 聽
56	内	ナイ	漢ダイ呉ナイ	泥	隊	合	一	去	蟹	36b2 聽
57	如	ニヨ	漢ジヨ呉ニヨ	日	魚	開	三	平	遇	01b7 聽
58	能	ノウ	漢ドウ呉ノウ	泥	登	開	一	平	曾	08b8 聽
59	派	ハ	漢ハイ慣ハ	滂	卦	開	二	去	蟹	02a3 聽

四書の訓読における字音の諸問題

60	盲	ハウ濁平	漢マウ	明	庚	開	二	平	梗	19b8 序
61	兵	ヒヤウ	漢ヘイ呉ヒヤウ	滂	庚	開	三	平	梗	20b5 聴
62	物	フツ	漢ブツ呉モツ	明	物	合	三	入	臻	02a4 聴 06a3 聴
63	物	モツ	漢ブツ呉モツ	明	物	合	三	入	臻	06b1 聴
										27b4 聴
										30a5 聴
										43b3 聴
										43b4 聴
60a3 聴										
64	俛	フン	漢ベン	明	彌	開	三	上	山	15b2 序
65	盆	フン上	漢ホン呉ボン	並	魂	合	一	平	臻	49b2 経
66	法	ホウ	漢ハフ呉ホフ	幫	乏	合	三	入	咸	16a4 聴
67	法	ホツ	慣ホツ	幫	乏	合	三	入	咸	01b7 聴
68	慢	マン	漢バン呉マン	明	諫	開	二	去	山	66b3 注
69	名	ミヤウ	漢メイ呉ミヤウ	明	清	開	三	平	梗	20a4 聴
										26b3 聴
70	明	ミヤウ	漢メイ呉ミヤウ	明	庚	開	三	平	梗	01a2 聴
71	猛	ミヤウ	漢マウ呉ミヤウ	明	梗	開	二	上	梗	39b1 聴
72	無	ム	漢ブ呉ム	明	虞	合	三	平	遇	19a2 聴
										19a3 聴
										19a3 聴
73	聞	モン	漢ブン呉モン	明	文	合	三	平	臻	20a4 聴
74	問	モン	漢ブン呉モン	明	問	合	三	去	臻	28a6 聴
75	勇	ユ	漢ヨウ呉ユ・ユウ	余	腫	合	三	上	通	39b1 聴
76	用	ユウ	漢ヨウ呉ユウ	余	用	合	三	去	通	04b3 聴
77	應	ヨウ去	漢キヨウ呉オウ	影	證	開	三	去	曾	11a7 序
78	夭	ヨウ平	漢エウ	影	宵	開	三	平	效	56a7 経
79	億	ヨク	漢呉オク	影	職	開	三	入	曾	08b2 序
80	或	ワク	漢コク呉ワク	匣	徳	合	一	入	曾	28a6 聴
81	抑	ヲク	漢ヨク呉ヲク	影	職	開	三	入	曾	23a1 聴

呉音38例 呉音はその大半が現代日本漢字音でも使用するものである
標準字音は佐藤進等編『全訳 漢辞海』第三版（三省堂、2011）による